

関西学院の めざす未来

130年の歴史と伝統を誇る関西学院では、常に時代に即しての新たな変化を重ねています。昨年、創立150周年を見据えての将来構想が策定され、さらなる大きな発展が期待されます。同窓としては喜びであり誇りである母校の未来を語っていただきました。



関西学院の 歴史も未来も 支えるのは同窓の力



式（経済・商・理学部合同）終了後、全
共闘の建物占拠により午後の卒業式は
中止となつて、学部別に卒業証書が授
与されたことを思い出します。

昨年より、同窓会会長をお引き受け
し、同窓の方々へ接する機会も増え、さ
まざまな意見を頂戴しています。

平松 私は同窓会とは長い関わりがあ
りまして、1970年卒業で、68年〜69
年は学生紛争で関学も大荒れでした。
それぞれの立場がありますが、私は全共
闘とは対極にありまして、「母校を守り
たい」という気持ちが強くて、ヘルメットを
かぶらない、武器を持たない、石を投げな
いと丸裸で彼らと対決しました。同窓の
方が会社の寮を貸してくださって、そこ
を拠点に活動しました。印刷物を作って
学生に送ったりする郵便代なども同窓
の方が支援してくださりました。同窓の
みなさんと協力しながら行った活動が、
強い連携を持つきっかけになりました。学
生時代の一番大きな思い出です。それ
もあって同窓会大好き人間です。卒業
後、専門の世界会計学会などで世界に
出ていくことがありましたが、世界のど
こに行っても関学の同窓の方にお世話し
ていただきました。学生、教員として同
窓の方とは強い結びつきの中で関学生
活を送ってきました。

理事長というのは経営の最終責任者
であり、教務面は各学校長を中心によつ
ていただいています。経営の責任を持つに

あたつては、同窓の方々のお力添えが非
常に大きな比率を占めます。財務的には
学費が中心になって支えているのですが、
精神的支柱は母校を思ってください。同
窓によるサポートやアドバイスが大きい
です。ご寄付だけでなく、忠告や提言をし
ていただくことが同窓の方に期待する
ところですし、強い結びつきで学校経営を
行い、今後も学院と同窓会の連携が、学
院の重要な概念になると思っています。

舟木 3年前に宗教総主事になって同
窓会に関わらせていただいたのですが、第
一線で活躍されているトップの方が多い
ことに改めて気づかされました。社会的
立場のある方々が同窓会の中では、それ
ぞれが重責を担う中でご自身が感じる
ことをざつぱらんに語ってくださいいま
す。大学の中だけでは視野が狭くなり
がちですが、複眼的にもものを見ることや忌
憚なき意見が聞けることは同窓ならで
は、時には辛辣な意見もあります。が、
そこには母校への愛が溢れています。

院長という立場は幼稚園から大学院
までの各学校、同窓、教職員の方と関わ
ります。ここで起こることの中には誤解
がある場合などもあり、そういうことを
解きほぐしながら、つないでいくリゾン
的な役割なのかなと。お互いの尊厳を大
切にし、お互いの価値を認め合うキリス
ト教がベースにある関西学院の中で、そ
の理想を具現化するお手伝いをするの
が院長の立場だと思っています。

今年度から理事長に就任された平

松理事長と舟木院長、同窓会会長と
して2年目を迎えられる西名会長に
6月14日オハラホールにご参集いただ
きました。

まずはご自身と関西学院の関わり、
同窓会との関わりについてお聞かせく
ださい。

平松 今年は、私にとって記念すべき年
でして、関西学院との付き合いが、よう
ど60年になります。1960年の中学部
入学から生徒・学生として15年間学費
を払い、その後41年間は給料をもらう
立場で、さらに3年間は常任理事として
学校経営に携わり、今年、理事長を拝
命いたしました。

関学創立130周年、上ヶ原キャンパ
スへ移転してから90周年、私の60周年の
意味ある年にあたり、幸せなことだと
思っています。

舟木 平松先生とは正反対で、小・中・
高は公立でした。その小・中学校もいま
や閉校になり、母校と呼べるのは関西学
院くらいです。関学に奉職してからは、
経済学部で宗教主事を担当しました。
チャペルアワーや1年生の基礎演習のクラ
スをルーティンで持っていました。この4
月からは、オムニバスの授業以外は持つて
いません。3月までは授業をしていたの
に、4月からまったく生活が変わり、転
職したような感じです。

西名 私は68年の卒業ですが、紛争中
で卒業式もたいへんでした。午前の卒業

2万9千人の在校生をつなぐ 垣根のない関西学院



理事長 平松 一夫(ひらまつ・かずお)

1970(S45)年高学部卒。75年高学専攻科博士課程単位取得満期退学。同年高学部専任講師就任を経て、85年同教授。2002-2008年学長。2016年定年退職。関西学院大学名誉教授。Satya Wacana Christian University 名誉博士。日本学術会議第20-21期会員、日本会計研究学会会長、世界会計学会会長、企業会計審議会会長などを歴任。2019年4月理事長に就任。

院長就任から2カ月で、たいへんお忙しいかと思いますが、どのような関心をめざしておりますか。

舟木 私の前任は田淵結先生で、その前はアメリカメソヂストの宣教師、ルース・M・グルーベル先生が3期を務められました。バイリンガルで活躍され、たいへん印象深い院長でした。田淵先生は、関西学院の一員であるという「We are Kansai」をアピールされ、お一方とも個性的な先生です。そのあとを受けて、私は「垣根のない関西学院」を作っていきたいと考えています。上ヶ原キャンパスに移って90周年ですが、その頃の写真をみるとキャンパス全体が広々として垣根のない状態です。第4

代院長として責任を持っておられたC・J・Lベーツ先生は、その形状を「We have no fences」とおっしゃいました。そこには教員や職員、学生、それぞれ役割は違いますが、壁のない、垣根のない関係で、より良い関学を作り、運営していくという思いが込められていたのでしょうか。

今はキャンパスが8つありまして、在校生は2万9千人を超えています。これだけ大きくなると垣根ができてしまうことにもなりかねません。だからこそ垣根のない学院であり続けたいいけないという思いを強くしました。

平松 垣根がないという話でいうと、全学部共通科目や少人数制を導入したきっかけとなったのは、小寺学長代行提案です。これは、69年の紛争の終結と大学改革が始まるきっかけとなった立派な改革案でして、すべてが実行されてはいませんが、その多くの部分が今も教学の方針に生きています。

テレビ会議のように授業をつないだ双方向でやり取りが可能なICT=Information and Communication Technology(情報通信技術)の導入で、討論会を行える時代でもあります。そのために三田と上ヶ原の授業開始時間を合わせるようにしましたが、キャンパスをつないで一つの授業を受けることで、どれだけの一体感を養えるかは難しいところで、課題として残っています。

土曜日は授業がないと思っている学生がほとんどかもしれませんが、紛争後、土曜日は改革推進日と称して、学生が集まって大学の改革について考えようという日にあてられていました。その後土曜日は休みになりましたが、小寺学長代行提案から生まれたものなのです。

舟木 精神的につないでいくために自校教育も行われています。各学部に宗教主事がありますが、関学の成り立ち、宗教リテラシー的なことをどの学部でも学ぶ機会を設け、一貫教育の中で行っています。時間はかかりますが、少しずつ実りも出てきています。初等部から上がってくる中で、キリスト教のベースを持ちながら関学のアイデンティティーを担っていることを感じる環境を用意していきたいです。

紛争時代は関学にとって大きな歴史ですね。紛争があったからこそ、新しい関学への道ができたのではないでしょ

うか。
今では8つのキャンパスがあります
が、離れたキャンパスをつないでいくためには何が必要だと思われませんか？



ていますが、その先駆けとなった授業
「関学」学では創立から現在までの歴史を学び、色々な時代があったからこそ今の関学があることを知ります。そういう共通理解こそが大きくなったキャンパスをつなげていくことになるのではないのでしょうか。

西名 私が関学に通って思ったことは、見た目が大切だということです。関学は綺麗で、第一印象がいいですよ。当時から50年経ってキャンパスは増えましたが、上ヶ原キャンパスの正門、時計台の周りなどの印象は変わりません。50年間ずっと良い伝統によって守られてきたのでしょう。同窓会行事は上ヶ原で開催してほしいと声が上がるのも、当時と変わらない学校を訪れたいと思う方が多いからでしょう。しっかりと伝統を守っていただいていることを誇りに思います。

平松 時計台の後ろの図書館や、中央講堂も建て替えましたが、一見すれば同じように保っています。アメリカ人建築家のヴォーリスが設計した美しい学校を変えないように意識して守ってきました。

西名 守っていこうという意識があることも伝わってきて、ハードだけでなくソフトも含めていい学校です。孫の代まで通わせたいと思う学校ですね。同窓生にとつては、故郷を思うような愛が芽生えます。そういう学校も珍しいかもしれませんね。そういう思いをそれぞれが持て

るようになれば、自然に同窓生としてつながるのかもしれない。

卒業後も心をつなげる スクールモットー “Mastery for Service”

関学には誰もが知っているスクールモットー“Mastery for Service”があります。どういう理解が良いのでしょうか。また、校歌も歌える同窓生が多いのも関学の特徴ですね。

平松 理解は、それぞれが異なっていると思います。「奉仕のための練達」と訳されますが、わかりにくいということもあって現代語訳を作ったこともありま。しかし、この「社会貢献のために」こそ実力を身につけよ」は長くて覚えにくいこともあり結局使われることがあまりありませんでした。

舟木 “Mastery”は熟練、“Service”は仕えるという意味もあります。仕えるとは、社会的弱者の視点になって社会を見て、弱者に優しい社会へと変革し、世界全体が優しく、豊かになるように修練するということです。

西名 “Mastery for Service”は校歌にも入っています。同窓会の会合に出ている方は校歌が歌える方がほとんどです。同窓会での行事では校歌と讃美歌を必ず歌います。伝統というべきなのか、校歌を歌い続けようという同窓会の努力が、母校愛も含めて根付いています。

平松 大学の入学式でCD「関学の歌」を配布したりしていますが、歌う機会が少ないためか、歌えない学生もいるようです。体育会系が活躍すると必然的に歌う機会が増え、ゼミの先生方も意識して取り入れる方も出てきたりするので、スポーツの活躍を支援するようにしていきたいですね。



中央講堂

この先も愛される 関学であるために 2039年に続く新しい道



院長 舟木 讓 (ふなき・じょう)

1988(S63)年神学部卒。90年神学研究科博士課程前期課程修了。日本基督教団京都御幸町教会、神戸栄光教会の担任教師を務めたのち1998年経済学部助手(宗教主事)に就任。専任講師、助教授、准教授ののち、2013年に教授。人権教育研究室長、大学宗教主事を歴任。2016年学院宗教総主事を経て2019年4月院長に就任。

昨年、創立150周年を迎える2039年を見据えた関西学院の「超長期ビジョン」とそれを実現するための前半(2026年まで)の方向性を示す「長期戦略」からなる「Kwansei Grand Challenge 2039」が策定されましたが、「これについてのお考えをお聞かせください。」

平松 “Kwansei Grand Challenge 2039”は、かつての小寺学長代行提案に匹敵するぐらい高く評価されるもので、大胆で積極的なプランです。

私は実行していく立場になつたわけですが、理事会で承認されたものを忠実に、かつ変えるところは大胆に変えながら実践していかなければならないと思っ

ています。これを全部行っていくとなると財政的にはたいへんです。優先順位はありますが、多面的に実行しながらきつちりとやっついていかないと考えています。

そのためには大学だけではなく、グローバルな展開も必要です。時代に即したITの進展、新しい分野を取り込んで財産に変えながらチャレンジもしくなくてはなりません。また、マイナスの要因でいうと少子化や関西経済の地盤沈下との戦いもあります。それをどう克服するかなど、英知を結集して建学の精神を守りながら、新しい関学を構築していかなければならず、同窓の方と一体となつて推進していかなければなりません。

西名 “Kwansei Grand Challenge 2039”において、同窓会としての役割があると思うのですが、パンフレットを見た同窓の方から当面の動きをもう少しわかりやすく伝えてもらわないと「議論に至らない」と言われます。教職員のための発信ではなく、24万人の同窓生に発信している意識を持っていただきたい。

同窓会長として同窓の方と交流すると「今の関学はどうなっているの」と聞かれます。卒業生は関学が大好きですから、皆さん難しくは聞かないのです。

“Kwansei Grand Challenge 2039”はたいへん良いと思いますが、プランばかりでなく起こしたアクションが見えないので知りたいと思っています。そういう発信が必

要です。

平松 確かにそうです。先日、東京で同窓の方にお会いしたら、将来の展望の長い解説ではなく、具体的に何をしているのかが知りたいと。そういう意味では、母校を誇りに思えるような活躍などは、身近でわかりやすいですね。スポーツだけに限らずあらゆる分野に対して同窓の方が誇りに思えるような支援策を今後も検討し、実行に移していきたいですね。

活躍する同窓に支えられ 躍動する関学へ

西名 同窓会の役割は24万人の同窓が、関学を卒業して良かったなと思っただけのことです。そういう人たちの思いを形にすることで、寄付にもつながってい



同窓会会長 西名 弘明(にしな・ひろあき)

1968(S48)年経済学部卒。同年オリエン・リース株式会社(現オリックス株式会社)入社。1998年取締役兼執行役員副社長就任。2005年オリックス・リアルエステート(現オリックス不動産株式会社)代表取締役会長就任。2009年オリックス野球クラブ株式会社の代表取締役社長に就任し、現在は名誉会長。2018年4月同窓会会長に就任。

くと思います。たとえば、受験生が減ったという事実を伝えるだけでなく、打開するために何をしているのかを学校からも伝えてほしいです。

平松 そういう意味では、全学部でスポーツ強化に力を入れるようになりました。課外活動といっていたものを、正課外教育ということで学校の教育の中に取り込み、クラブ活動を通じて人間力を強めていくというスタンスに変えてきました。

西名 関学のイメージが良くなるように、ブランドイメージを上げるために全力でやっていたんだけど、少子化は10年先ではなく、今日、起っています。評価の高い大学として残るためには、ブランドイメージが大切です。

同窓生で、素晴らしい活躍をされている方も多いですが、今日あるのは母校のおかげと口に出す方は少ないですね。賞を贈るなどして、学校は応援していますよと示すことが必要です。

平松 最近は関西学院賞を出していますが、もつときめ細かく出していきける体質に変わっていきたいですね。意思決定は以前よりはしやすくなっていますので、アイデアが通っていく場になければいけませんね。ダイナミズムはそういうところからでてくるものです。同窓で活躍している方からは名前を貸していただくわけですから、そういうところに表彰なり、感謝を伝えることがあってもいいはずですね。

舟木 それも危機管理ですね。学校つ

てつづれないという神話がありました。ここ10年で経営に行き詰っているという話は頻繁に起こっていますので、対応しないといけないという現状があります。

企業で働く人だけでなく、アントレプレナー(起業家)として活躍されている方や、NPO活動などに力を注いでいる方など、同窓にはたくさんいらっしゃるの、そういう方も顕彰していきたいですね。

西名 マメさ、派手さもありますよね。同窓会では、若手の同窓の集いも行っています。ビジネスマッチングです。大学は卒業すると終わりではなく、5年から10年経つと、何となく昔の仲間が懐かしくなります。いろんなところで活躍する同窓生をつなぐのも同窓会の役割です。

平松 関学は教職員だけで作っているものでなく、ステークホルダーは同窓、保護者、企業、近隣の方たちです。唯我独尊にならないように、そして、「躍動する関学」でありたいです。

西名 同窓会としてもサポートしていきます。それが仕事です。同窓会誌についても、直接同窓の方の手元に届くのは、「母校通信」だけです。学校の生の声もお届けしていきたいと考えています。

関学と同窓会、お互いに情報共有して助け合って活動していくことを基本に、良い形をつくっていきますように願っております。ありがとうございます。

《鼎談を終えて》

編集委員長 塚本 恵美子

本当にご多忙な3人の方々にお集まりいただき、お話を伺えただけでもとても幸せで貴重な時間でした。

平松理事長の、関学と共に歩んで来られた60年間の歴史や深く熱い関学への思いに触れて、今、理事長の激務を引き受けられたお気持ちも少しわかるような気がしましたし、これからはすべきことへの強い決意と意志を感じました。

舟木院長は、色々な経験や経歴を経て関学に來られたことを知りました。多様な経験に裏打ちされた人柄に、すっかりファンになりました。

西名会長は、2年目に入り、益々「西名流」のトークや行動が冴えわたり、あら、いいのかしら?というところまで、学院側に切り込んで話していただきました。会長の話術のおかげで、かなりのところまで話を進めることができました。感謝です。

巻頭企画としては、この鼎談のほばれ話や柔らかな雰囲気は伝えられないのが残念です。けれども、同窓会と学院の関係性や役割、これからの関学の進むべき道、同窓生の望む関学の姿...などについては、かなりのところまでお伝えできたのではないのでしょうか。